

社会人経験のある学生が看護師に転職する動機と 学びつつけている現在の思い

天野道代、大見サキエ

The Thoughts and Motivations of Nursing Students with Previous Work Experience

Michiyo AMANO, Sakie OMI

キーワード：社会人経験，看護学生，転職

Key words : work experience, nursing students, career change

はじめに

近年2025年問題への対策として、医療・福祉・健康などの成長分野における雇用の創出が求められ、文部科学省(2012)は、社会人経験者の高等教育の場での学び直しを推し進めている。この背景として、①少子化による18歳年齢層の減少により労働力の確保が困難 ②若年非正期雇用者の増加による経済不安と再雇用支援の課題 ③超高齢社会を迎えるにあたり医療・介護分野の担い手不足がある。

一方学び直しを望む社会人学生には、①大学、専門学校を卒業した学生 ②諸事情で進学機会が得られなかった学生 ③他業種を経験したあと転職のため国家資格取得を目指す学生 ④結婚、出産、育児、介護等により一旦家庭に入った後、再就職や離婚後の生活立て直しを目的とする女子学生 などがいる。このように年齢、職場経験、生活経験、学歴など様々な社会人経験をもった学生が増加しており、受け入れる側の教育機関は、個々のもつ特性、能力、社会的

背景など生涯の発達課題による体験に基づいた教育の検討が必要である。

社会人経験のある学生(以下 社会人学生)の学び直しを受け入れる教育機関の現状は、一般大学全体では25歳以上の入学者の割合は1.6%(文部科学省：2014)に留まり減少傾向にある。一方、看護師養成所(以下 看護専門学校)における社会人学生の占める割合は、23.7%(日本看護学校協議会：2012)で増加傾向にあり、厚生労働省(2015)も看護専門学校における積極的な社会人学生の受け入れ支援のための指針を示している。また、社会が求める看護人材について、文部科学省の斎藤(2018)は、「看護実践能力の質の向上が必要で、生涯にわたって社会に貢献できる人材の育成が看護教育のコアである」と述べている。また、社会人学生の“社会人基礎力”つまり、経済産業省のいう職場や地域社会で人々と仕事をしていくために必要な力については、「業種が変わっても活用できる業務遂行上のスキルとして汎用性技能(ポータブルス

キル)があり、前職での経験で得られた能力として、人間的側面や強みが育まれ、仕事の仕方や人との関わり方として発揮され社会人として必要とされる能力が育成される」と言われている。“社会人基礎力”の枠組みから考えてみても、社会生活を通して培った経験は、人との関係をつくる能力、課題をみつけ取り組む能力、そして自分をコントロールする能力の獲得が期待できる。近藤(2013)は、新人看護職の調査により、社会人経験のある方が、ない看護師より社会人基礎力が高いと報告している。

更に魚住ら(2015)は、看護短期大学に通う社会人学生の特徴について調査し、「多様な経験がベースにあり看護師国家資格取得という自立・自律に繋がる明確な動機と家族の支えがあり、学びつづけている」と述べている。しかし、明確な入学動機の背景もまた多様であり、能力の高い社会人学生が入学後進路変更するケースもまた多く経験する。入学後も個々に応じた支援をするためには、学び直しを決意するきっかけや看護職を選択する動機、入学後看護への思いについてどのような特徴があるのか把握する必要がある。

先行研究では、西谷(2003)は、大卒者が看護専門学校を選択する動機について、「大学生活や職業生活が看護職への関心を高めるという特徴がみられ、看護職になるという明確な意思で選択していた」と述べている。島田ら(2014)の社会人学生に関する文献レビューによると、「職業選択動機は強く、学習態度とも比例しており、学生生活に馴染むための努力をしている」と述べ、更に今後は「個別的な語りを聴取することで質的な課題が抽出されること」、「教員や指導者の研究が少ないこと」、「子育て後のキャリアデザインを尊重し支援する研究が望まれる」などが指摘されている。また、小玉ら(2017)による看護系大学に入学する社会人学生に関する文献レビューでは、「入学動機は、看護への関心、職業としての安定感、社会貢献と仕事のやりがい、などの内発的動機である。」と報告している。

そして、「豊かな感性や柔軟性のある思考が求められるため、社会人経験者の個別性に配慮した相互作用の中での支援が必要」と分析している。

根岸(2012)は、「社会人経験者は、看護を学ぶことを魅力的に捉え、これまで身につけた価値観や態度を省察し、自己変容の必要性を認識していた」と述べ、魚住(2009)は、青年期特有の心理発達に関して「青年期の発達課題の到達度は、社会人経験のある学生が有意に高い」と報告しているが、その要因は明確にされていない。渡邊ら(2014)は、専門学校の教員を対象に社会人学生への教育活動について調査し、「社会人学生の生活経験や職業経験で培った社会的スキルを活かしながら、自己洞察による行動変容を支える学習支援を行っている」ことを明らかにした。馬場ら(2011)は、卒業後の看護師志向に関して社会人経験の有無による違いなどを報告し、高卒の現役学生とは異なる特性が述べられている。更に「社会人経験者の看護師志向の特徴は、単に看護職に対する憧れや、他者からの勧めだけではなく、職業経験の中で看護職への関心を高め、自己の適性を考慮し、明確な意思と学習動機を持っている」ことが明らかにされている。

このように現役学生とは異なった生活体験がベースにあり、明確な目標を持って看護専門学校に入学してくる社会人学生の背景を把握することは、入学後も学習意欲を失うことなく、学業を継続できるよう有効な支援に繋がると考えた。社会人学生が、入学前看護師への転職を考える動機は何か理解し、入学後はどのような思いで看護を学びつづけているのか、学習者の視点でより詳しく研究することは意義がある。

I. 研究目的

本研究の目的は、社会人学生が、入学前看護師への転職を決意する動機と、入学後看護を学びつづけている現在の思いを明らかにすることである。

＜用語の定義＞

- 1) 社会人経験：高校卒業後4年以上一般社会での体験を有しているものを社会人経験ありとする。入学時22歳以上の成人で、高校、専門学校、短大、大学、大学院卒業後、就労経験がある、または、専業主婦の経験も一般社会での経験に含むが、就労形態や経験年数は定めない。
- 2) 転職：高校、専門学校、大学卒業後一旦職に就く（前職とする）、または結婚後家庭に入るが、看護師の資格取得を目指して看護専門学校に進学する。
- 3) 看護学生：3年課程の看護専門学校で就学中の学生

II. 研究方法

1. 研究デザイン

半構造化面接による、質的帰納的に記述する研究デザイン。

2. データ収集期間

20〇×年7月～8月。

3. 研究対象者の選定要件

便宜的に抽出した、A看護専門学校の1年から3年の学生を対象にした。A校は社会人経験者の入学率が35～40%と高く、全国の平均を上回っている。対象者は、看護専門学校入学時22歳以上であり、①専門・短大・大学・大学院卒業後、正規、非正規、職種、勤務経験年数は問わず勤務経験がある者 又は ②主婦経験がある者 のいずれかに該当する者を社会人経験ありとした。全員に研究目的を説明し、主旨に同意した14名の学生を研究対象者とした。

4. データ収集方法

インタビューは、対象者に希望日時を確認し、プライバシーが保護される静かな場所で、1名30分～45分程度の半構造化面接を1回行い、その内容をICレコーダーに録音し、逐語記録を作成した。インタビュー内容は、①看護師に転職しようと考えた動機 ②入学前、看護師という職業に対するイメージ ③入学後、看護を

学びつづけている現在の思い ④将来の自分自身の課題や不安について 等である。

5. データ分析方法と妥当性は

各事例の逐語記録より、研究目的に関連した①入学前の転職を決意した動機 ②入学後将来への不安を含めた看護への思い について述べている重要な部分を抽出し、初期コード化した。次にその内容の相違性、同質性を比較分析し、サブカテゴリーを生成した。そして、意味が類似する集合体ごとにカテゴリ、大カテゴリにまとめた。

分析過程において、スーパーバイザーの助言を受けて検討し、データの妥当性を確保した。

6. 倫理的配慮

本研究は、A看護専門学校の倫理審査会の承認(承認番号：第17-01)を受け、実施した。研究参加者には、研究目的、方法、参加は自由意志であり、一旦同意しても撤回が可能であること、それによる成績等には無関係であり個人に不利益がないこと、得られたデータの管理・消去方法、プライバシーの保護などについて文書と口頭で説明し、同意書と研究説明文書を封筒に入れて一定の期間設置した投函箱に留め置きとし研究者が回収した。同意書への同意の署名により同意を得られたものとした。

III. 結果

1. 研究対象者の背景

表1 研究対象者の背景

事例	入学時の年齢	性別	最終学歴	直近の職種(経験年数)	婚姻関係
A	30代前半	男性	大学卒	医療職(5年)	無
B	20代前半	男性	専門卒	美容系(半年)	無
C	30代後半	女性	高卒	専業主婦(13年)	有
D	30代後半	女性	専門卒	服飾系(11年)	無
E	30代前半	女性	大学卒	専業主婦(8年)	無
F	20代後半	女性	専門卒	医療補助職(1年半)	無
G	40代前半	女性	短大卒	美容系(15年)	有
H	30代前半	女性	短大卒	美容系(9年)	無
I	30代前半	女性	専門卒	一般職(3年)	有
J	30代前半	女性	専門卒	専業主婦(2年)	無
K	20代後半	女性	高卒	一般職(4年)	無
L	30代前半	男性	大卒	公務員(11年)	有
M	20代後半	女性	短大卒	医療補助職(2年)	無
N	30代前半	男性	大院卒	研究員(1年)	無

参加者は14名で、年齢は20歳代前半から40歳代前半、平均年齢31.3歳、女性が10名、男性が4名であった。学年は、1年生が9名、2年生が2名、3年生が3名である。最終学歴は、短大・大学・院卒は7名、専門卒は5名、高卒は2名である。入学前の直近の職業は、医療補助を含めた医療系が3名、一般職が2名、公務員1名、美容・服飾系が4名、専業主婦が3名、研究員1名である。就労期間は、半年から15年であった。社会背景としては、既婚者は9名、その内5名は離婚経験があり母子世帯である。

2. 分析結果

転職を決意し、看護職を目指すきっかけとなった体験と、入学後看護を学び始めて気づく思いの意味内容より抽出された5つの大カテゴリと12のカテゴリを入学前と入学後の2つ分けて整理した。

入学前の動機からは、【看護への関心】があり、自分自身や家族の病気体験を通して看護師と出会うことで、漠然とではあるが看護への関心や思いが育まれていた。続いて【転職の決意に繋がる体験】では、前職への揺らぎと葛藤の中でもどかしく働いていた実態があり、その中で看護職に惹かれていく思いが強くなっていき転職を考えるきっかけに繋がる。

看護専門学校入学後は、実際に看護を学ぶこ

とを通して【看護を学ぶことの価値】を見出し【自己の成長へと歩みだす】ことを意識しながら、看護を学ぶ価値や意味を自覚し学びが深化することで、自分が看護職を選択した今回の決意を肯定していく。そして、【学業を継続するためのサポートの存在】を認識し、家族や仲間と共に歩む看護職へと続く道程に自分の将来を見据えていた。

大カテゴリは【】、12のカテゴリは『』、31のサブカテゴリは< >で表示し、具体的な意味を象徴するローデータを「斜体（事例：学生コード）」で記述し、その内容を具体的に述べる。

1) 入学前の動機

(1) 【看護への関心】

『看護への漠然とした興味、関心の芽生え』『病気体験を通して看護と出会う』の2つのカテゴリが含まれる。入学前には看護にどのようなイメージを持っていたか、関心はあったのかに対して、<未知の看護の世界にぼんやりと思いを馳せる>程度であったが、「中学の頃から医療系の仕事に興味があった(A)」「医療職は自分にはほど遠く違いすぎた(K)」と語り、気になる職業としての認識はあった。しかし、看護職との出会いがきっかけとなり、「意味のある仕事を一生続けていける看護師に憧れる(E)」など、今まで抱いていた<医療職への興味が憧れに変わる看護師との出会い>に繋がる。その出

表2 社会人経験のある学生の看護師への転職動機

大カテゴリ【2】	カテゴリ『6』	サブカテゴリ< 15 >
看護への関心	看護への漠然とした興味、関心の芽生え	未知の看護の世界にぼんやりと思いを馳せる 医療職への興味が憧れに変わる看護師との出会い
	病気体験を通して看護との出会い	病気体験で自分が救われたと感じた看護師の存在 家族への看護や関った看護師の活動から看護の素晴らしさを知る
転職の決意に繋がる体験	前職に取り組む自分の思いや葛藤	前職に対する喜びとやりがい感が募る
		前職で感じた否定的な感情と揺らぎ
		自分の能力にもどかしさを感じ働く
		自分の意思に拘らず周囲の慣習を優先した離職経験
転職をポジティブに捉える経験	勉強し直したい意欲の高まり	過去の興味ある分野に挑戦してきた自分の選択
		前職で磨かれた能力
		やり直したい気持ちを後押しする新たな価値観にきずく
人生の危機を乗り越えるための選択	人生の危機を乗り越えるための選択	弱い立場の自分への社会支援の存在を知り奮起する
		迷える現状を打開するため進路を変える勇氣
		離婚がきっかけとなり自分らしく生きようという思いが深まる
		絶望から這い出るための人生の選択

会いは鮮烈な体験として語られる。「早産してしまい、毎日通う病院で看護師に出会った。(略)NICUであの時の看護師との出会いがなかったら、今の自分はない。(略)看護師が私の不安を察し、日記を書くことを勧めてくれたことで、先の見えない未熟児の不安から開放されて、母としての自覚が持てた(E)」と語り、遠い存在だった看護師が自分の中に強く認識されていく。また、〈家族への看護や関った看護師の活動から看護の素晴らしさを知る〉の中には、祖父母の介護をする看護師から掛けられた言葉により何もできない自分が救われた体験や、在宅での看取りを支援してくれた看護がいかにか大事な存在か気付いていく。こうした自分自身や家族の『病気体験を通して看護と出会う』ことが看護への関心の高まりとして語られていた。

(2) 【転職の決意に繋がる体験】

『前職に取り組む自分の思いや葛藤』『転職をポジティブに捉える経験』『勉強し直したい意欲の高まり』『人生の危機を乗り越えるための選択』の4つのカテゴリが含まれる。

『前職に取り組む自分の思いや葛藤』には、〈前職に対する喜びとやりがい感が募る〉〈前職で感じた否定的な感情と揺らぎ〉という、相反した感情が表現されている。例えば、「美容の仕事では、お客さんが自分の接客で、“病気で辛い気持ちが晴れやかになった”と言われて嬉しかった(H)」「患者が“透析になって嫌な人生だと思ったけどあなたがいてくれて楽だわ”と言われたのが嬉しい(A)」であり、半面「美容のサービスは販売が目的で、ノルマのため嘘をつくのが嫌(H)」「看護は失敗が許されないけど服飾業界では、不良品も一杯出るしやりがいのなさや、無力を感じた(D)」という感情にも囚われる。そして、〈自分の能力にもどかしさを感じ働く〉や〈自分の意思に関らず周囲の慣習を優先した離職経験〉に至る。前職の業界の特殊性だけではなく、「保育士は、子どもの病気や怪我の時応急処置はできても、一歩先が見えなくて怖かった(I)(M)」「救急医療はやりが

いはあったけど、チームの上下関係が厳しくて現場の判断に根拠がなかった。(L)」「夫の希望もあり妊娠して会社を辞めたが、まだやりたいことがあったという未練があった。(略)仕事をしないままもやもやした状態では、自分の価値が見出せない(E)」「職場の慣習として当たり前のように、結婚して保育士(美容師)を辞めた(H)(I)」と、キャリアと自分の人生の狭間で葛藤する思いを語っている。

『転職をポジティブに捉える経験』とは、以前の転職経験を再認識する過程で、〈過去の興味ある分野に挑戦してきた自分の選択〉〈前職で磨かれた能力〉があり、前職で頑張ってきた知識や技術について確信する。「柔道をやっていたし“人助けがしたく”警察官となったのは良かったけど、実は助けるより懲らしめる仕事だった。1年で転職して公務員に挑戦し、直接人の命に関する救急の仕事に就いた(L)」「美容は色々な人と関わって、違った目線で老人や子どもとの接し方が身についた。(略)自分がやりたいことをやることで物事に積極的になれた(B)」「保育士を辞めてクリニックに勤めたのは、看護師になりたい自分の気持ちを確かめるためだった。(略)コミュニケーションは保育士の時磨かれた(M)」と語り、人生設計として仕事を選び、状況が変わっても活用できる能力とは何か認識している。

『勉強し直したい意欲の高まり』は、〈やり直したい気持ちを後押しする新たな価値観に気付く〉〈弱い立場の自分への社会支援を知り、奮起する〉〈迷える現状を打開するため進路を変える勇気〉の3つのサブカテゴリーが含まれる。「自分に足りないところは何だろうと考え、一からやり直したい(F)」「生きているうちに社会貢献がしたい気持ちを家族に訴えた(I)」「弱い立場の人が救ってもらえる社会だからこそ自分も夢が持てる(C)」「進学のおきっかけは、離婚してから母子家庭に補助される公的な経済支援があることを知ってから(J)」「ゆがんだ組織の中で人に意見を言えるには、自分には力が

ない。付加価値をつけるために資格を取る(L)」「大学卒業(薬学)の道が4年生で断られたのが、本気で進路を考えるきっかけだった(N)」「航空会社の仕事は、飛行機に乗って人生のプラスアルファーだけど、看護は人生の基盤を支える、なくてはならない存在で価値ある仕事だ。自分が一生突き詰めたい仕事に出会った(E)」と語り、自分と向き合い、社会と向き合いその結果、看護師の資格に挑むことが目標になっていく。

『人生の危機を乗り越えるための選択』は、離婚や絶望から這い出て自分らしく生きる道を探る姿が現れている。「離婚後、ああ看護師になりたいという思いがどんどん深まっていった(E)」「離婚してからは自分らしく生きようと思えた(J)」「離婚はしたが、結婚して子どもができたことは良かったし、離婚したから今がある(K)」と辛い人間関係を乗り越え、精神的にも経済的にも手に職をつけて自立しようとするための選択に関する強いモチベーションが語られる。

2) 入学後学びつづけている現在の思い

(1) 【看護を学ぶことの価値】

『看護の本質に触れる体験により価値と魅力を見出す』『看護職を選択したことを肯定する』は、入学して看護の勉強を始めて、あらためて

看護の魅力と価値について学び、転職して看護学校に入学した自分の選択は全てプラスになっていると認識する。〈今日に至る全ての出来事が自分のプラスになっている〉では、離婚したこと、転職したこと、退学したこと、入学してから自分が何をしたかったのか考えたことを含めて、「色々過去にはあったが、それがあったから今こうして1から学校で頑張れる。(略)結果として全てプラスになっている(F)」「離婚したから今学校に来られたという意味で、全てプラス志向で生きている(K)」「看護学校が自分を受け入れてくれた経験は大きい自信になった(C)」と看護職に賭ける思いを語る。

(2) 【自己の成長へと歩み出す】

『自分が目指したい看護師像に近づく』『自分が成長するための課題を発見する』と『看護師の厳しさや将来の不安と向き合う』の3つのカテゴリが含まれる。目指したい看護師像が明確になり、そこに近づくための今の自分に足りない課題を認識する。そして、どんな看護がしたいと思って進学したのか、看護観として表現する。「看護は人のため、そこに価値がある仕事だから続けたい。(略)今はこんな看護師になりたいというイメージができて気持ちが強くなった(H)」「勉強して身についた知識は、全て患者に活かせる喜びがある。(略)自分がスキルアップすることで看護が深まり自分も成長できる

表3 入学後学びつづけている現在の思い

大カテゴリ【3】	カテゴリ『6』	サブカテゴリ<16>
看護を学ぶことの価値	看護の本質に触れる体験により価値と魅力を見出す	看護の奥深さを実感する看護師との出会い 人の生活全てに繋がる看護の価値について学ぶ 学びによって確信する看護の魅力を自分の言葉で語る
	看護職を選択したことを肯定する	勉強を始めて自分がなりたい看護師のイメージがより明瞭になる 人と関り、人を支える看護の活動を自分の将来のプランとして表現する 生き方まで考えるようになった自分自身に驚く
自己の成長へと歩み出す	自分の目指したい看護師像に近づく	自分の課題を見つけ自己変革できる看護の勉強は楽しい 学んだことの全てが繋がる看護の勉強は有意義
	自分が成長するための課題を発見する	働き方に選択肢が多い看護職に賭ける思いが強まる 今日に至る全ての出来事が自分のプラスになっている 自分の強みや弱点を認識して看護に活かす 将来どうありたいのか自分の中にある軸を自覚する
	看護師の厳しさや将来の不安と向き合う	看護師としての自分の将来は不確か不安
学業を継続するためのサポートの存在	家族や仲間の存在により自分の選択をサポートする	自分と家族の人生が掛っている学校生活を続けることの重み 自分を理解し励ましてくれる家族や仲間の存在が頑張れるモチベーション 自分が看護師になる事が家族にとって心の支え

(J)」と、誇りを感じながら学んでいる。また、3年生に見られた特徴的なサブカテゴリーとして、〈自分の課題を見つけ自己変革できる看護の勉強は楽しい〉には、「以前の自分は人をぼんやりとしか見られなかった。今は突っ込んで見るようになったら、相手に感情移入できる自分に驚く(N)」前職の自分は独りよがりだった。看護はチームです仕事だから、だんだん人格が丸くなった。(略)自分にも人にも厳しさを求めていたことに気づいた(L)」など、2年間積み重ねた学びを振り返り、看護師を目指して歩んでいる現在の生活と自分の変化について語っている。そして、〈看護師としての自分の将来は不確かで不安〉と卒業後のキャリアプランがまだ実感できないことを自覚しながら、〈将来どうありたいのか自分の中にある軸を自覚する〉の中には「“人助けがしたい”気持ちが根っこにあり、これは変らない。卒業後は前職に戻るかもしれない。でも、どんな仕事をしててもこれはブレない(L)」今までは人の目を気にして自分の意見を言わずに流されてきた。(略)自分をもつようになったら、相手のことが分かるようになった(J)」と語り、看護職としてだけではない生き方を見据えていた。

(3)【学業を継続するためのサポートの存在】

『家族や仲間の存在が自分の選択をサポートする』のカテゴリが含まれる。前職で培われた能力を確認し、どのように看護に生かせば良いか考え看護職を選択した自分にとって、家族や仲間の存在を意識する。卒業後看護師として働く将来への不安も見つめながら、〈自分と家族の人生が掛っている学生生活を続けることの重み〉〈自分を理解し励ましてくれる家族や仲間の存在が頑張れるモチベーション〉〈自分が看護師になることが家族にとって心の支え〉は、家族の存在は重荷である反面、身近な家族と仲間の存在は絶対的に信頼できるパートナーであり、また、自分が頑張ることは、家族にとっても安心感を与える相互関係にあると認識している。「絶対的にそこにいる存在としての父母が

自分を支えてくれる(E)」自分が看護師になることでパートナーとの生活と心を支えられる(D)」「これからは茨の道かもしれない。でも子どもにとってどんな親でありたいかという新たな価値観が生まれた(E)」と語り、家族や仲間と共に歩む人生の道程に、看護職を重ねていた。

IV. 考察

1. 社会人学生が看護師への転職を決意する動機

本調査における看護への転職を考えるきっかけとなった動機は、西谷(2003)、小玉ら(2017)の先行研究同様であったが、「看護への関心」と「転職の決意に繋がる前職への満たされない思い」についてより詳細な背景が明らかになった。

18歳人口減少の中で、成長分野といわれる医療における社会人の学び直しの障害として指摘されている1つに、文部科学省(2012)は、「人材を有効に育成するための学習システムの構築、カリキュラムの開発」とも言われている。その1つに看護専門学校に入学してくる社会人学生の能力をどのように計ればよいのかという課題がある。入試制度や単位互換性の検討が行われているが、学力だけではなくこれまでの人生や仕事上の経験から築いてきたスキルや強みをどのように生かしながら看護師への転職を決意したのか分析する。今回2名の語りに着目して考察する。

社会人学生の強みとして、前職で育まれた社会人基礎力は、看護職として将来の適性を図る上で重要な要素である。彼等の多くは、転職の動機として前職での感いや不安も見られたが、業界で身に付けた能力について、例えばコミュニケーション力や対人関係構築力は概ね肯定していた。根底には人と関わることで達成される喜びを強く望んでいる姿があり、それだけに、前職では根拠となる知識をベースにして他者を支える関係が築けない状況にジレンマを感じ、転職を決意する思いを語っている。そんな中で、看護職を目指すことが自分らしく生涯長く仕事

をする上での新たな目標となり、能力の獲得に繋がって行く。

目標を持って働いていたEさんの場合、結婚して退職した時、仕事を失った自らの価値まで見失っていた。その後自分と幼子が看護師のサポートで救われた体験を通して「看護は人生の基盤を支える、なくてはならない存在で価値ある仕事だ。一生突きつめたい仕事に出会った」と語っている。Eさんにとって仕事とは、自分自身であり、人格そのものとして認識されている。しかし、女性はライフイベントによってキャリアの中断を余儀なくされ、自己価値が低下する危機に出会う。あらゆる危機的な状況の中で看護師との関係が築かれ、自ら看護師になることが目標となって歩み出した時、心の奥底に看護への強い志向性が生まれ人生と仕事が融合される感覚を得ることで将来への展望が拓かれた。

体験から得る能力とは、一つのスキルの有無を問うのでない。Eさんは、人との関りから学ぶ力の獲得が重要であったと考える。佐伯(2014)は、人はなぜ学ぶのかについて次のように述べている。「状況の中に身を置いているときには気付かなかったことが、ただ観ているのではなく、人と人は二人称的な関りにより全身で感じとることができる。“学ぶ”とはこうした共倫的関係を生み出すことである」一般職では、職場の中で効率的に能力が発揮されることに価値がおかれるが、Eさんは、自分が最も苦難な状況の中で、自分と他者が二人称的関りがもて、自分らしさの感覚が発揮される職業として看護職を選択する。

次にLさんの場合は、3度目の転職であった。入学前は、“自分”にもっと付加価値を付けたい、スキルアップのためと意気込んで飛び込んだ看護の世界だった。しかし、人と関る看護に求められる能力は「人をトータルで見つめること、論理的に物事を考えること、チームで仕事をするために自分がどうあれば良いのかが重要であることを学んだ」と気付いく。こうした新しい

価値観を獲得することで社会人基礎力を向上させ、人助けができる仕事に対する認識の幅が拡がり自己変革していったと自覚する。先の経済産業省の報告にも「社会人基礎力とは、学生だけに必要な能力ではなく経験を重ねた社会人にも、生涯を通じた育成が必要である」と述べられている。Lさんの場合、前職までの職業生活で身についた、人に役立つ自分でありたいという原点が一貫してあるのが特徴で、主体的に考えて行動化できる社会人基礎力を発揮し、全く異なる職種であっても自分を生かす転職へのモチベーションが維持できたのではないか。そして、学校生活で学びつづけていく経験は全て看護師なるための課題であり、「卒業後は前職に戻るかもしれない。でも、どんな仕事をしても人助けがしたい気持ちはブレない(L)」と語り、学校生活をやり遂げることは一つの区切りであり、その後の生き方、働き方への自信と充実感を深めていた。

深田(2012)は、「20歳から40歳までの人の半数が、職業人としての生き方に心理的葛藤を抱く」と述べており、更に「職業的アイデンティティは、職業人としての自分らしさの感覚、つまり自分なりの目的をもち主体的に生きているという感覚」が重要であると説明している。多くの学生が、前職に対して揺らぐ思いを抱いていたことが転職のきっかけであることが明らかとなった。こういう経験をしている人達を看護の世界で活用することは意義があることだと考える。つまり、社会人経験者の多様な背景や能力を見極め、生涯を通して育成するためには、個々に応じた自分らしさを伸ばしていくための教育環境がより求められることが示唆された。

2. 社会人学生が入学後学びつづけていくための課題

社会人学生の、「看護を学びつづけていく価値」や「自己の成長へと歩み出す」「学業を継続するサポートの存在」とはどのような意味があるのか、入学動機とも関連させて考察する。

入学前からの看護師への志向が育っていく過程には、2つの特徴があった。1つ目には、自分自身の病気体験や家族の看護に関った看護師と出会う体験がある。こうした夢、憧れ、興味を持つなど、看護へ進む動機については現役学生との違いは少なく、専門職業人としての看護職のイメージは漠然としている。2つ目には、前職に対する否定的な感情や、もどかしい思いに駆られる体験がある。更に離婚など人生の危機的状況の中で勇気を持って選択していく逞しさがある。学び直したいというきっかけは多様であるため、なぜ看護師になりたいのか、そのための準備や、学校生活の情報など提供していく必要がある。入学直前に離婚を経験したJさんは、「将来は、子どもと両親と暮らしたくて看護師を選んだ。自分がスキルアップすることで看護が深まり自分も成長できる仕事が看護だ」と語り、仕事に対する価値が自己実現と重なることで、なぜ自立した専門職として看護職を目指すのか自分の意思を明確に表現している。離婚が契機となり生活の立て直しが必要となる女性は多く、国家資格取得を目指し卒業後の職業選択と直結する専門学校への進学の特典や、社会支援に関する情報のインフラが十分備わっている社会が望ましい。入学後も、サポートが得られているか配慮し、学習が継続できる生活全体を捉えた環境作りが課題である。

看護職への高い関心に支えられた学習動機の存在も明らかになった。人は職業体験を通して学習を積み重ねていくことから、松尾(2017)は、新人を育成するための支援として、個人が経験からいかに学ぶか説明している。つまり、「挑戦し、振り返り、楽しみながら仕事をする時、人は経験から多くのことを学ぶことができる」と述べており、更に「経験が重要となる理由として、kolbの提示した経験学習モデルを修正し、『具体的経験』を『内省』し、『教訓を引き出す』ことで『新しい状況への応用』することで学んでいる」ことが明らかにされている。今回研究に参加した学生の多くは、インタビューを通して自

分の経験を振り返ることで看護職への強い関心や学ぶことの意味を自己洞察し、転職をマイナス要因とせず、前職での経験を生かすことの意味を見出していた。

保育士から転職したIさんは、「自分たちの前職に関心を寄せてもらえたことが意外で、経験してきたことを聞いてもらえて嬉しい。何故自分がここにいるのか改めて確認できた。(略)自分が成長することは全て良い看護に繋がる」と語っている。これについても、松尾(2017)は、「指導者は、内省を促し、教訓を引き出すためにポジティブ・フィードバックしていた」と述べている。入学後に、面談の機会を設けて社会人学生のサポート環境を準備することは意味がある。社会人学生の培ってきた学びの構造は、根っこに看護師への思いと人との繋がりを大切にしたいという軸があることが強みであり、意欲的に学ぼうとする姿勢がある。櫻井(2012)は、「学びが看護に活かしている実感をもつと学ぶことの楽しさ、有能感、充実感にフィードバックされ、学びが促進される」と述べられているように、看護師になるという目的が明確で、学習意欲が旺盛な社会人学生にとって、有効な経験学習モデルを生かす支援が求められている。

転職は、人生の大きな節目であり新たな挑戦でもある。しかし、経験を通して学習を積み重ねることで、他の領域に活用される能力が多く存在することが分かった。更に前に進んでいくために、社会人学生は常に経験(キャリア)を振り返り自己の成長を実感し、調和のとれた生きる力を獲得していた。転職は、1からの出直しではなく、経験学習サイクルの1つの段階と捉えた支援を考える必要がある。「如何したらいいか分からない」を「こうしたい」に変容させるためのキャリア教育(社団法人国立大学協会:2007)が提言されているように、社会生活における経験を語る場を設け、内省を引き出し、将来の不安にも対応できることで学生自ら学び続ける動機付けとなることが示唆された。

3. 本研究の限界と課題

本研究は、1つの看護専門学校を対象としたものであるため、一般化には限界がある。更に、縦断的調査ではないため、1年と2年、3年の差異は考慮せず、経時的变化や学びの深化は不明であった。2点については今後の課題である

V. 結語

14名の社会人学生の語りより、看護師への転職を考える動機と入学後看護を学びつづける現在の思いが明らかになった。入学動機は、【看護への関心】と【転職の決意に繋がる体験】が存在し、学び直しを決意する。看護専門学校入学後は【看護を学ぶことの価値】を見出し、【学業を継続するためのサポートの存在】を支えとし、家族や仲間と共に歩む看護職への道程に自分の将来を見据え、【自己の成長へと歩みだす】ことを意識しながら現在も学びつづけていた。

謝辞

本研究にご参加いただいた学生の皆様に深く感謝いたします。また、研究計画から論文作成までご指導いただきました、元岐阜県立看護大学 教授 西園民子先生に心より感謝致します。

引用文献

馬場貞子, 村中陽子(2011): 看護系大学院修士課程社会人入学生の特性と学習ニーズに関する研究, 日本看護医療学会雑誌, 13, 1-12
深田博己(2012): 心理学研究の新世紀2 社会心理学, ミネルバ書房, 53,
経済産業省(2006): 社会人基礎力に関する研究会 中間まとめ, 3,
小玉光子, 小畑千春, 水木暢子(2017): 文献レビューから看護系大学に入学する社会人経験者を考える, 秋田看護福祉大学総合研究所 研究所報, 12, 35-50,
厚生労働省(2015): 看護師養成所における社会人経験者の受け入れ準備・支援のための指針,
松尾睦(2017): 成長する管理職・優れたマネージャーはいかに経験から学んでいるか, 東洋

経済新報社, 34-35,
箕浦とき子, 高橋恵編(2014): 看護職としての社会人基礎力の育て方, 日本看護協会出版会, 6-9,
文部科学省HP(2017年10月16日検索): 大学・専門学校等における社会人の学び直しについて, www.mhlw.go.jp/stf/shingi/...att/2r9852000002ba2l.pdf,
根岸貴子(2012): 社会人経験を持つ学生が看護専門学校で学ぶことの認識, 日本看護学会論文集, 看護教育, 42, 26-29,
日本看護学校協議会HP(2017年12月4日検索) <http://www.nihonkango.org/exem/index.html>,
西谷千恵(2003): 大卒社会人経験者が看護専修学校入学に至る経緯, 日本看護学会論文集, 看護教育, 34, 119-111.
西田絵美, 勝眞久美子, 上平悦子(2003): 看護専門学校に入学した大学卒業者の特徴—高校卒業者との比較を通して—日本看護学会論文集, 看護教育, 34, 112-114
佐伯胖(2014): そもそも“まなぶ”とはどういうことか, 正統的周辺参加論の前と後, 組織科学, 48, 2, 38-49,
櫻井茂男(2012): 自ら学ぶ意欲の心理学—キャリア発達の視点を加えて, 有斐閣, 3-8,
社団法人国立大学協会(2007): 大学におけるキャリア教育のあり方, 教育・学生委員会
島田葉子, 鈴木由美(2014): 社会人経験のある看護学生についての文献レビュー, 桐生大学紀要, 25, 47-56,
魚住郁子(2009): 社会人経験のある看護学生の心理的発達に関する考察, 看護教育, 40, 278-280,
魚住郁子, 近藤裕子, 野田貴代(2015): 社会人経験のある看護学生が学校生活の中で学びつづけていくプロセス—学びの深化に関する体験の語り—to注目して—, 日本看護学教育学会誌, 25, 41-50,
渡邊恵, 鈴木玲子, 常盤文枝(2014): 看護専門学校(3年課程)における社会人経験のある学生に対する教育方法の現状分析, 日本看護学教育学会誌, 24, 55-65,